昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十九年十二月廿日印刷納本・昭和二十年一月一日發行
（毎月一回一日發行）
第十一卷 第一號

淨土

目次

表紙・卷頭カット……跡部白鳥
宣傳の戰果を……（卷頭）
大行者頭山翁……德富猪一郎・（一〇）
神々の國……吉田絃二郎・（一）
小磯首相と觀世音……戸松一峰・（一三）
寺庭の華……安井大學・（五）
必勝の信念……佐藤春夫・（八）
謙虛と猛進……（一三）
劍の境地……（八）
歌壇……岩野喜久代選・（一七）
俳壇……太田耳動子選・（一七）
純孝純忠純誠の人々……中村辨康・（一四）
編輯後記……（一八）

新年號

白鳥

宣傳の戰果を

「特別攻擊隊に續け！」昨年秋以來憤然とおこつたこの合言葉の中には、痛烈にして峻嚴なるものがある。「銃後のことは安心して、征けます」と一言殘して機上の人となつた特攻隊勇士の聲が絶え間なくわれ〳〵の耳を打つ。この聲を聞く毎に、われ〳〵の胸は燃えたち手足がふるへる。本年も亦ただ敢鬪あるのみ、誓つて醜の御楯と驕敵擊滅に身を以て猛進する覺悟である。

前線の善謀勇戰によつて大戰果が次々とあがる。この戰果をして最後の實を結ばしめることこそ一刻もゆるがせにならぬ銃後の任務である。ここに中立國ポルトガルの澳門總督テキセラ海軍中佐の談つた言葉を思ひ出す。彼は日本が東亞諸民族を開放せんとする聖戰完遂のためには、武器彈藥の必要は勿論ながらそれと同時に東亞の各民族の信頼をかち得ることが必要であるといふ。そして更に曰く「この民族の信頼なくして民族開放は到底望めないのである。ところが殘念ながら東亞諸民族に對する宣傳といふ點に於て日本は日本の敵國に劣る所があると思ふ。日本の敵國は實に巧みな手段を用ひ、金を惜しまず、多くの人を使つて東洋人の心を日本から引き離さんと普斷の努力を拂つてゐる。實際宣傳といふ點では日本はもつと積極的にやる必要があると思ふ」と。

われ〳〵は宣傳といふ言葉の中にとかく後めたいものを感ずる。しかしこれは單なる感じであつて、宣傳も亦戰ひの一つであることを忘れてはならぬ。各國の史上で謀略戰が恐るべき威力を發揮してゐたことを知つてゐながら、この方面に十分な戰果を擧げてゐないやうである。歷史は宗教の名に於て如何に辛辣な思想戰をなしたかを敎へる。これを以て他山の石とすべく、われ〳〵の責務のここにあることを感ずると同時に、從來無關心すぎたと思ふ。

神々の國

吉田絃二郎

島崎藤村最後の作東方の門が未完成のまゝ終つたことは御當人にとつては遺憾千萬のことであつたらうし、又日本文壇にとつても殘り惜いことであつた。藤村が東方の門に於てどんなことを書くつもりであつたか、あれだけのものからは判斷することは困難であるので想像することは差控へるが、この日本といふ東方の道の國、或ひは夢の國を求めて遠い旅を、又困難な海路を辿つて來た外國人は遠くはケンペル、シーボルト近くはラフカヂオハーンを初めとして歷史上に殘つてゐない人を數へてみたら相當多數にのぼるであらう。マルコポロの所謂道に黃金を敷つめた東方の國が、歐洲の航海者や冒險を好む若人達をして東方の門を叩かうと決心せしめることもあつたであらう。かういふ人達の目に映つた東方の夢の國は黃金の國であり銅の國であつたであらう。更にシーボルトやラフカヂオハーンの心に描かれた東方の國は詩の國であり、美しい夢の無限の國であり、幽玄な宗教の國であつたであらう。

東方の門を叩かんとした若い人達にはこの二つの種類があつたとみなければならない。この黃金や銅を求めて東方の門を叩かうとした人達からわれ〳〵の祖先が得たものは足利、織田、豐臣、德川の諸期を通じての絢爛たるかの國の文化であつたが、本當に東方の君主國の姿を世界の人々の前に示すことは出來なかつた。これに較べてシーボルトやラフカヂオハーンと云ふやうな一醫官、或ひは一青年學者に過ぎない、或ひは旅の一詩人に過ぎない人のこの國に捧げたる功積は忘れることは出來ない。今日若し世界のどこかに尙日本を理解する人々があるとすれば、この精神的日本をみたシーボルトやラフカヂオハーンの文獻に依るところが必ずしも少なくないであらう。

シーボルトやハーンの筆に描かれたものはやもすれば夢の國の物語であるやうに思はれるところもある。しかしながらそれは現實以上の確實性と永久性を持つてゐる。日本の眞の姿と

いふものはわれ〳〵が考へてゐるもの以上に深いものであり、高いものである。その尊い姿をシーボルトやラフカヂオハーンはつかんでゐたのである。東方の門を叩くべく遠い航海を續けて日本に辿りついた獨乙生れのシーボルトは、いさゝかの失望も感じなかつた。否彼は彼が和蘭に於て描いてゐた夢の國を現實の日本に見出したのであつた。このことはハーンの場合も同樣にいふことが出來る。シーボルトやハーンは最初からわれわれ日本人の友であり、味方であつた。

九十三年以前にペルリが日本に訪ねてきた。これは最初からわれ〳〵の味方として來たのではなかつた。かの和蘭やポルトガルの人々がわれ〳〵の日本を訪ねてきた心持は彼等の工藝品とこの國の金及び銅との交易であつたが、ペルリの來航は更にそれ以上の恫喝と侵略とを持つてゐた。彼等は公然と條約を結ばなければ大砲をぶつぱなすだけだと口外した。

今日日本の運命をかけてわたくしたちは戰つてゐる。アメリカとは實はペルリ來航のその日から戰鬪狀態にあつたといふことが出來る。この頃の若い人達はただ歷史上の事實に於てのみ知つてゐるのであらうが、わたくしたち年輩の人達はわれ〳〵がアメリカによつて與へられた侮辱、日本移民排斥、日本學童問題を初めすべてアメリカ人によつて與へられた民族的侮辱を忘れることは出來ない。われわれは四十年、五十年の昔からアメリカとの一戰を覺悟してゐたのであつた。彼等は日本移民を排斥しながら、一方に於ては日本訪問の美名の下にその誇示する大艦隊を横濱に向けた。これはペルリ以來の日本侮辱であつた。しかも日本はこれを歡待せざるを得なかつた。當時のわれ〳〵青少年の胸には遺恨骨髓に徹するの思ひが刻みつけられた。今度の大戰爭も日支事變以後に惹き起されたやうに考へる人もあるかも知れないが、少なくともわたくしたちにとつては半世紀以來の宿怨の爆發と考へられる。

話はもとにもどる。シーボルトやラフカヂオハーンが見出した日本の姿が今は更に高いもの尊いもの、神々しいものとなつて現れてきた。地下に睡つてゐるシーボルト達もからまでに尊い人間の姿が東方の國にあつたとは想像することも出來なかつたであらう。即ち戰陣に見る若い武人達の神そのものの姿である。

或る外國の作家の作品に、「神々の死」といふ小說がある。これはイタリアの文藝復興期に於けるレオナルトダヴンチの生涯を描いたものである。わたくしはここにこの作

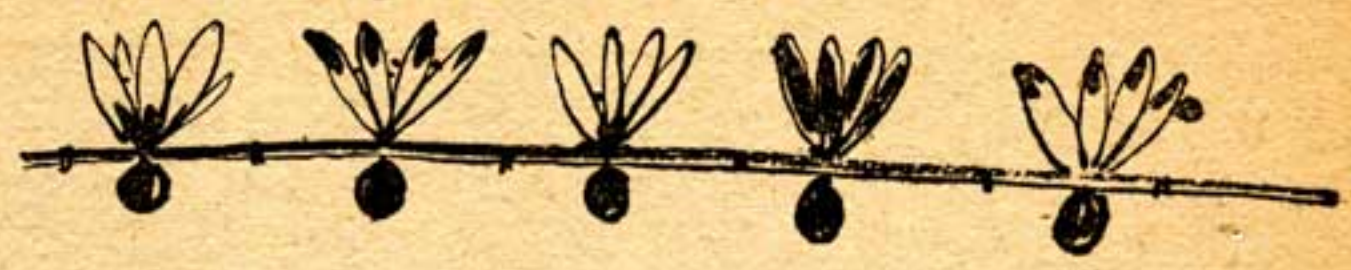
品の内容を語るつもりではない。この表題「神々の死」といふ名に興味を感じさせられるのである。昔はイギリスにもアメリカにも清教徒的な精神が昉白として生きてゐた時代があつた。しかし今や西の國々に於ては彼等の神々は死滅してしまつた。ただ東方の國に於てのみ神々は生きてをられるのである。戰線に散つて行く若櫻達はまことに神風をおこす人といふよりも神そのものである。無數の神々達がこの國を救ふために現れたのである。この戰ひは神々を失つた民族と神との戰ひである。戰ひは、今の微妙な國際關係から見ても益ゝ困難になるであらう。しかしわたくし達日本人がこと〳〵く神の心に生きる時、戰ひは必ずわれ〳〵のものであることを信ずる。

わたくしたちは潔よく散つてゆく若櫻の勇士を見る毎にシーボルトやハーンが驚いた以上にわが民族性の尊さに驚かされる。

二十歳そこそこの特攻隊の一勇士は「この婆婆にもずゐ分長いことおいていただいたからなー」と云ひ、莞爾として最後の攻撃に出掛けて行つた。この言葉は短いが神々の言葉を聞くやうな氣がする。悟り切つた聖僧の言葉を聞くやうな氣がする。靜かに考へて見れば一日生きてゆくことすら無限の神佛の加護である。二十年三十年生きるといふことは量り知れぬ天の慈悲である。しかもわたくしたちはこれを忘れ勝である。この一勇士の言葉は宗教的悟りの極地である。この悟りあらばこそ歸するが如き透徹の心もて死地につくことが出來るのである。わたくしたちは靜かに頭をたれるのみである。

今度の特別攻撃隊の勇士たちの内に學徒出身の若鷲たちの名が連ねられてゐることも心強い感じがする。比較的短日月の訓練を與へられたのみで、從容として最後の任務についてゐる。かつては青白きインテリと呼ばれてゐた青年たちがかくも雄々しく必死の壯行を敢へてしてゐることを聞くにつけても、わたくしたちはこの民族の明日の運命を祝福せずにはをれないと同時に彼等がかつて學窓時代に抱いてゐた或ひは哲學的或ひは宗教的な思惟生活が如何に尊い役目を果してゐるかを考へずにはをれない。

フランスでは詩人といふ言葉は馬鹿者といふ意味にさへ使はれてゐたらしい。この頃のアメリカ人にとつては同樣に哲學者といふやうなものは非現實的な人間のやうな輕蔑すらかつてゐたことが想像される。日本やドイツでは詩人も哲學者も尊敬される。宗教家たちは自分々々の任務の如何に大きな使命を持つてゐるかといふ



ことを考へねばならない。明治初年の排佛棄釋の慘憺たる大嵐にもかゝはらず佛教は今日の隆盛を來たしてゐる。それは各宗派の開山を初め偉大な先輩たちによつてこの國にはぐくみ育てられた根強い精神力、信仰心、信念の力といはなければならない。その力が如何に現代の戰爭に大きな役目を果してゐるかといふことを考へなければならない。以て自らを戒めなければならぬ。

かういふ時代になれば一層人間一人の力の偉大さを考へずにはゐられなくなる。この頃某方面の最高指揮官の名が發表された時、或る人はこれで十の力を出してゐた兵隊さんたちが十五、二十の力を出すやうになりますヨ、といつてゐた。行誡上人一人の存在が明治時代の佛教界に如何に大きな信頼と希望を與へたかといふことは今日尙人の知つてゐるところである。

今日は寒々とした時雨が降つてゐる。ここの病院に入つてきた頃は、まだあたりの樹立が靑々としてゐたが、もう窓から見ると梧桐の葉は黃ばんで散り始めてゐる。入院して數日後であつた。丁度名月の夜に當つたので武藏野の家から芒を持つてきてもらつて病室を飾つたことがあつた。私の病室と廊下を隔てた部屋に傳通院貫主布施虎寬老師が入院してをられた。さうして名月の翌日遷化されたことを聞いた。私は清淨に合掌しその冥福を祈り

名月を眺めて歸る佛かな

といふ句を手向けた。老師が亡くなられたかたわらに若い看護婦が獨り泣いてゐたといふことも聞いた。今朝時雨の窓を眺めてゐれば、隨分遠い過去の出來事だつたやうな氣もする。

この病院に入る前に私が上野廣小路のある店で、行誡上人全集を見て家に歸つたが入院してから一層行誡上人全集を求めなかつたことを後悔した。そして友人に賴んでその店に行つてもらつた。幸ひに上人の全集はわたくしの病室に運ばれた。わたくしは退院の日を待つてゐる。今度は家に歸つたら眞先きに上人の全集を讀みたいと思つてゐる。眞の宗教家、眞の人間の光、味といふものは死後月日を隔つに從ひ、ますゝ現れてくるものらしい。行誡上人の尊い光、眞人間らしい味といふものは今日以後一層この民族の間に深い關心を持たれるであらうと思ふ。

わたくしは今二人の佛教界の先達を特に書いてみたいと思つてゐる。一人は唐招大寺の開山鑑眞和尙、一人は行誡上人である。

寺庭の華

實話

▽中野久子女史の菩薩行△

淨土宗庶務部長　安井大學

中野久子女子は鳥取市寺町一行寺に住み、寺庭婦人として鋭意努力してきた。それと同時に寄る邊なき老病者、不具者又は幼兒に對しては親身も及ばぬ世話をみてきた。

或る時のこと、一人の身窄らしい老婆がきて新佛が出來たので回向をして欲しいといふのであつた。尙よく質ねてみるとこの老婆は偶然の機會からもう一人の老婆と長いこと同居してゐた。二人とも同じやうに貧しく身寄りとてなかつたので、淋しい境遇をお互に力を合せて、その日〳〵を暮してゐたところがその内一人の方がフトしたことから病氣になり、遂に息を引とつた。しかし何處にお願ひに行くところもないので、お寺さんに賴みにきたといふわけであつた。それでは恐らく何も出來ないで困つてゐるであらうと、女史は老婆に伴はれてその家まで行つてみた。なる程その家に一歩入ると壁は落ち障子は破れて塵まみれのひどい荒屋であつた。その中で、死んだ老婆は線香一本あげられることもなく煎餅布團の上に横たはつてゐた。見るからに鬼氣迫るものがあり、如何に長く同居してゐたといふものの老婆はただ目を覆ふ氣持で手のつけやうがなかつたのである。無理もない病床に呻吟してゐた老婆の身體は、未だ生きてゐる内から蛆がわいてゐて尻に穴をあけ、そこを出入りしてゐたさうである。また顏が黑く見へるのも實は一面にわいた虱のためであつた。見れば見る程すさまじいものであつた。

さすがの女史もこの樣子をみては、一時たじろいでしまつた。しかし一體、誰れが後の世話をするだらうか、このまゝでほつておくわけにもゆかない。あゝ氣の毒にといつもながらの菩薩心が女史に勇氣をつけた。同居の老婆を相手にただ二人だけで湯灌から納棺まで一切女史の手で行はれて行つた。久し振りに老婆の五體が清められた。心なしか老婆の顏が微笑んでゐるかのやうに見られるのであつた。

一昨年秋夏には鳥取市を中心に大震火災の慘事があつた。この時一行寺も大きな被害を受けた。本堂は全くつぶれてしまつた。庫裡は半壞

日支事變始つて以來前線に銃後に或ひは生産增强に戰意昂揚にと、身を以てあたり僧侶たるの本分をつくし、一宗として表彰されたものは可成りの數にのぼつてゐる。その數多い中でも昨年五月十一日に表彰された者の中に中野久子なる女性があつた。これは寺庭婦人として初めて管長表彰を受けたといふ點からのみでなく、表彰されるまでの女史の働きが男にも及ばぬ數々の篤行であつたところに一層の注意をひくものがある。いやそれよりもさすがは女性なればこそで、男の眞似かねる働き振りだと感嘆せずにはゐられない。默々功を誇らぬこの女史の活躍こそ、いよ〳〵苛烈を極める戰時下にあつて實く寺庭婦人の龜鑑とするに足るものであると信じるのである。

し、そのまゝでは雨露さへしのぎ難い有様となつた。しかし邊りをみれば燒け出された人々が雲集してゐた。女史は自分の所をさしおいて、早速身仕度を整へた。まだ餘震のおさまらぬ中を他の婦人會の人々と力を合せ罹災者救出に懸命に働いた。負傷者の避難手當も迅速に行はれた。或る時は猛火の下をくぐつて男にまさる働きもあつた。これがすむと今度は炊き出しであつた。こうして次から次に獅子奮迅の働きをなして何の位多くの人が助かつたであらうか。同じく被害を受けながら自己を無にして他を救つた人々によつて幾多の人がその恩惠を蒙つた。

さて火災も鎮つてみると、思ひかけない罹災死者の多かつたのに驚いた。このため鳥取市では四ヶ所の死體收容所と三ヶ所の臨時火葬場を設けて後始末に大童となつてゐた。これらの場所には知恩院と淨土宗務所から急遽赴いた慰問使隊によつて連日連夜の回向が續けられたとは云へ、到底十分な處置は難しかつた。臨時火葬場と名こそついてゐたが、實は露天の河原に設けられてゐたので、そこにつまれた横死者の屍には油が注がれて火葬にするといふのに過ぎなかつた。夜になれば屍の燒く河原の明りがポツーと赤くみへ、悽慘の極みであつた。

或あ日寸暇を得てお香線一本持つて火葬場に赴いた女史は、この樣子をみてたちまちこれではならぬと菩薩大慈悲心を燃えあがらせた。その日から女子は一々の屍に湯灌をし有り合せの淨衣を着せて廻つた。勿論横死者全部にさうすることは出來なかつた。しかし火葬の順を待つ死者に對して一體でも多くと力の續く限り根かぎり女史は專心努力した。

罹災死者の死體が發見出來なかつた遺族も數

篤志寄附者芳名

左記の通り本會活動資金にと篤志寄附下されました。深謝いたします。

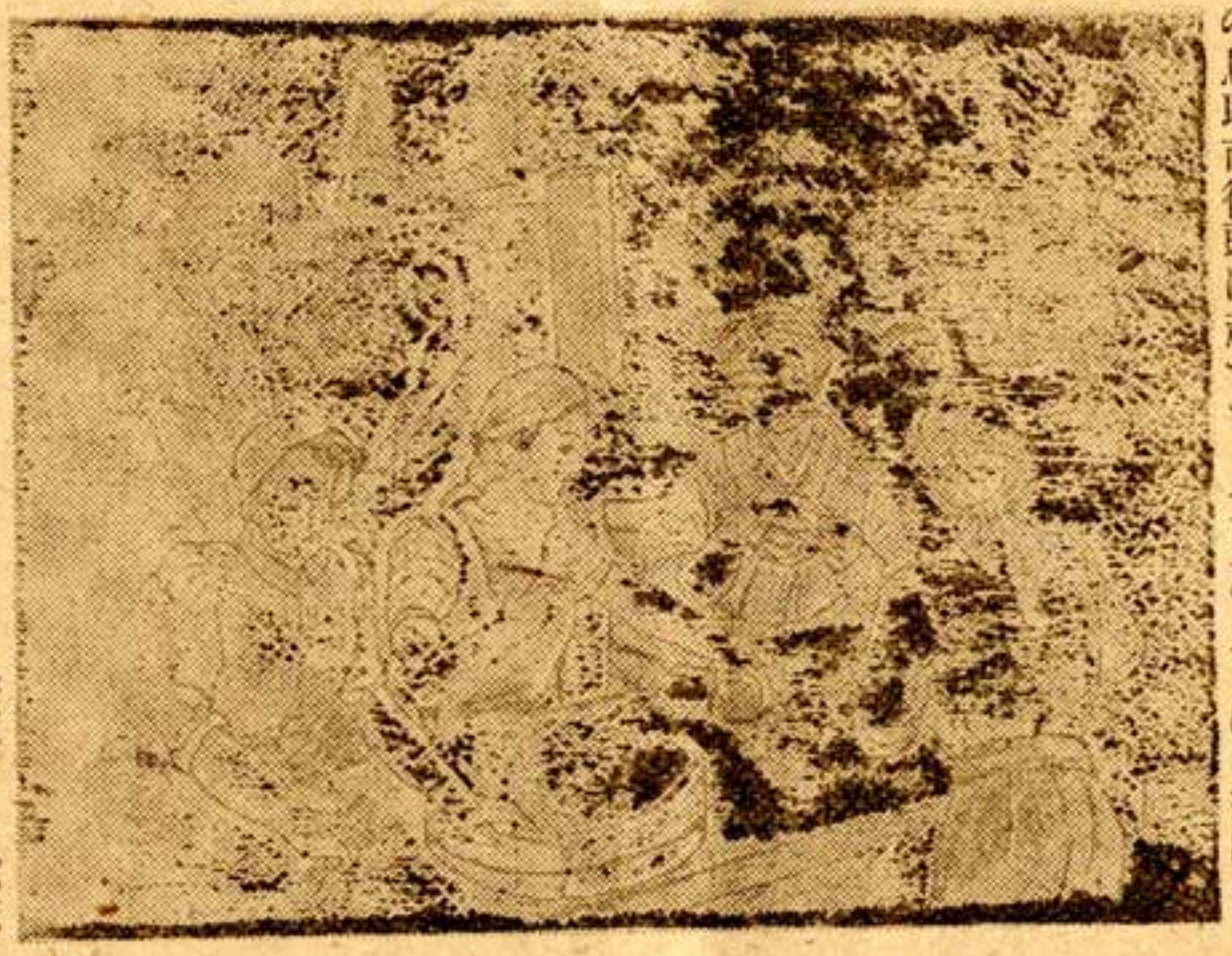
金五十圓　東京都本郷區駒込東片町　丸山俊誠殿
金三十圓　芦屋市打出小槌町　山本顧彌太殿
金十五圓　福岡縣八女郡水田村　近藤ハル殿
金十五圓　福岡市新大工町七三　高柳榮一殿
金十圓　京都市左京區東大路二條下ル　金子章一殿
金九圓九十錢　大阪市西區九條中通一ノ一〇　植苗福次郎殿
金八圓六十三錢　東京都板橋區上板橋町四ノ八　五九六一　上田德五郎殿
金八圓三十二錢　大阪市西成區岸松通三ノ一　吉川ひろ殿
金六圓五十四錢　臺北市榮町二ノ三三　吉村芳藏殿
金五圓　小野田市　某殿
金四圓　ビルマ派遣森四八二七　五木田好一郎殿
金三圓三十錢　廣島市堺町二　山本イト殿
金三圓二十二錢　東京都西多摩郡青梅町五二　福田浪太郎殿
○
金三圓　川崎市久本大蓮寺　大橋靈定殿
金二圓　北海道空知郡瀧川町瀧ノ川西一丁目瀧泉臺八石社宅　上野綱吉殿

多かつた。從つて誰の、屍が女史の手により淨められたかも判らない。しかし判らないながらも、女史のこうした手厚いお世話に人々は涙を流して喜んだ。遺族達にとつて、罹災地復興を目指して起ちあがらんとするのに大きな意氣を吹き込んだことは事實である。

淨土宗報國會で提唱した愛國機「明照號」献納運動は全國各地に異常な感激をまき起したが、鳥取市方面は震災後日も淺く、復舊に余念のない際であるから、この運動に際して資金勸募は聊か考慮されるところがあつた。しかし事實はかゝる考慮は全くの杞憂であつた。事實は豫想外の献納金が集まり、割當標準の二倍半に達するの多額にのぼつてしまつた。

この献納運動に際しても女史の活躍は目覺しいものがあつた。女史は一行寺婦人會十九名を督勵し、一月八日大詔奉戴日の寒空の中を終日街頭に起つて資金募集を叫び續けた。かねてから女史の篤行について感嘆してゐた地方の人には、女史の前に置かれた献金箱の中に默つていくらかの金錢を投げ入れて行つた。その結果わずか一日で、女史の手許に集つた献納金は、四百四十圓二十三錢といふ金額にのぼつた。この女史の奮闘に刺戟されて、この地方の献金が豫想外に集まり、人を驚かせる程に到つたことは云ふまでもない。

女史の秘められた篤行が、女史の勸募に、表はれたことは云ふまでもない。しかし復興半ばの鳥取市街頭に起つて、女史の火とはく絶叫が



この好結果をまねいたのである。女史は「明照號」献納といふだけでも十分の熱意を感じた。だがほんとは女史をしてかくまで絶叫させたのには、もつと〳〵大きい理由があつたのである。

女史は長男を航行隊操縱士に、次男を戰車隊に、そして三男を學徒荒鷲にと愛兒を全部第一線に送つてゐた。女史は次々と入隊する愛兒たちに笑ひさへ含んで激勵し戰線に送り出してきた。しかるに戰局は何うであらうか。第一線勇士からは機あつても飛機のない嘆きが聞へて來るではないか。愛兒たちも亦第一線にあつて銃後生産の一層速かならんことを、新鋭機の續々戰線に送られんことを身を以て痛感せしめられてゐるのであつた。飛行機さへあれば戰ひは必ず勝つ。今の一機は後の十機百機にも當る。「飛行機を送れ」、この聲こそ女史が寢ても覺めても一刻も忘れ得ぬ萬雷と響く言葉であつた。

女史が街頭で叫ぶ烈々たる資金勸募の聲は道行く人々の足をとめずにはおかなかつた。女史の絶叫は戰場で奮戰する愛兒の聲でもあつたからである。

こうした女史の菩薩行の數々は、遂に管長表彰といふ形となつて現れたのである。この表彰を身にすぎたものとして、女史はます〳〵報國の至誠を燃やしてゐる。現在女史は自分の手許に頼る者ない二人の低能者をおいて養ひ、心靜かに愛兒たちの武運長久を祈りながら戰局を見守つてゐるのである。

（中村芳子畫）

必勝の信念

佐藤春夫

臺灣沖、比島沖と空に海に皇軍の連戰連捷は御同慶の極の至りである。これを歡喜するのは國民の至情で、喜ばなければ異なものである。それ故、ただ喜ぶばかりでなく爾來增產の能率も大に昂つたといふのは重ねて同慶至極である。それに難癖をつけるやうに當つては甚だ不本意であるが、嚴密に云うと今日この歡喜を味ふ資格のある人はサイパン失陷の當時必勝の信念の微動だもしなかつた小數の人だけに限るのが至當なやうな氣もする。あの時必勝の信念の大ぶん怪しくなつてゐた手合が大ぶん多かつたやうに見受けるのが苦々しいからこんな事を云ひ出したのである。尤もあの時うろたへたのも愛國の情憂國の念には相違なかつたがそれにしても見ぐるしいのは依然として見苦しからう。しかもこの見ぐるしいのはどちらかといふと所謂知識層といふ側に特に多かつた。それ故、我々の身邊は動搖連が多すぎた。自分が必勝の信念を失はなかつた一人と確認出來るのは僅に出入の植木屋ぐらゐなものではあるまいか。

今日植木屋はあまり入らぬ。僕のところへは焚木をこしらへに來るだけであるが、門の梧桐の枯れたのを伐り大ぶん助かつたが、今度は枯れたのだけでは間に合はないから、實を結ばなくなつた柿の老樹に及んだ。桐も柿も樹齡二三百年と鑑定される大木だけに正に小園の一戰禍ともいふべきである。この次は毛蟲の巢になつ

劍の境地

戰局の推移に一喜一憂するなとはよく云はれる言葉である。しかし事實は大局に立つて己れを持すことは難しい。すぐに喜びすぐに憂へてしまふ。人情といへばそれまでゝあらうが、國を擧げての總力戰にこの種の人情は許されない。

澤庵禪師が柳生但馬守に送つた「不動智神妙錄」の中に、「心を何處に置かうぞ、敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるるなり。……兎角心の置所はないと言ふ」とある。劍の極意としては、「心をばどつこにも止めぬが眼なり肝要なり。どつこにも置かねば、どつこにもあるぞ。心を外へやりたる時も、心を一方に置けば、九方は缺くるなり。心を一方に置かざれば、十方にあるぞ」といふ無念無想の境地なのである。

てゐる櫻に及ぶ手筈である。

この植木屋は十年ばかり前から出入してゐるが、親の代をうけて獨立した時偶々イの一番で頼んだのが自分の所であつたとかでその因縁を重んじて、公用でない限りはどの得意をもさし措いて拙宅へ來るといふ氣風の職人である。仕事もかげ日向なくする。サイパンの悲報の當時は防空壕の手入れをさせてゐたが、家内が何やら悲觀説めいたものを口にすると親方は言下に

「何でえじよぶでさ、負けやしませんや。あちらかうして毎日一生懸命で働いてゐまさ。これで負けてなるものですか」

と答へたと聞いた。あちらの言葉は簡單であるが實感に富んでゐて心強く感じられた。自分が一生懸命に働いてゐる限りは大勝を確信するといふのはまるで提督のやうな自信であるが、あちはそんなつもりではなくその頃毎日いそがしい徴用や、何かを指したのかも知れないが、何にしても自分が極力努力する限り負ける筈はないといふのは實に頼もしい。事實國民の各自がみなその職分を一生懸命に盡せば戰ひは勝つ道理である。彼は自分の懸命な努力を確信し、同時に他のそれをも確信して疑はないから何の心配もない。自分もこれ位働くのだから況んや前線の將士はと信じ頼し切つてゐるのである。己を信じ他を信じさて一國の運命を信じてゐる。要は信念の問題である。この類の素朴な信念が指導者や知識階級の間よりもあちの連中に多いのも注目すべき現象である。信念は知識や理窟にはよらないでどこまでも信念だからである。信ずる心はまさしく惠まれた一つの天分である。さうしてわが國の一般民衆市井の所謂愚夫愚婦がこの信ずる心に惠まれてゐるのは民族の美點で、わが國力の無限の強さであらう。最後になつて思ひ出したが、この職人はいつぞや、本誌に書いた「ジヤワの櫻」の文尾に書いた職人と同じ人物である。

相手の劍が己れより劣つてゐれば論外であるが、眞の勝負は互角の間に決せねばならない。心のあり場所の難しいのも修養の大切なのもそのためである。

豫備學生の感想に曰く、「己れを無にすることである」「理論をなくし身を以て事に當ることである」「一死奉公の誠を捧げることである」と。そして又「娑婆氣をなくすことである。」と。この娑婆氣といふ言葉の中に何か不徹底な、ものを甘く見勝ちな、自分本意の考へ方といつたものが感ぜられる。

戰爭を何か華々しいものかのやうに感ずる者があるなら、それは戰爭の實體を知らぬ者である。しかし今まで戰場が地理的に遠かつたため、戰爭の實相に觸れ難い人が多かつた。眞劍勝負を見物するのでは劍の道は判らない。それなのに敵の魔劍の前に己れの生命をさらしてゐる意識の薄い人がある。戰ひは先づ自分で劍を持つ時に始まる。（村瀬）

大行者頭山翁

徳富猪一郎

する見識は不言の中に、一代を指導する貫祿を有つてゐた。

◎志「大東亞」にあり

隣邦支那、印度等の解放について、翁は陰に陽に眞劍に努力せられた。殊に支那の改革派の人々が、いかに翁によつて力強い支援を得たかは申すまでもない。一時、彼邦亡命者の誰もが、直接間接に翁の力を藉りて、その一身を庇護せられ、その理想の實現に到るまでの常夜燈として仰望したことは周知の事實である。翁は夙に大東亞の團結とそ、暴戾貪婪なるアングロサクソンを、東半球より放逐する最大の爆彈であることを主張して來た世界的偉人であつた。翁は先見の明に富み、世態人情に通じ、また物の大局を握んで、細事に拘泥しなかつた。

◎尊皇精神の結晶

翁の思想の大系は尊皇の精神であり、最も敬虔なる皇室中心主義者であり、謹嚴なる敬神家であり、また熱烈なる愛國者であつた。この三大信念は即ち、翁が不動の敬天愛人の思想となつて、九十年を一貫した。

◎平野國臣と翁

尊皇愛國の熱情はこれを翁の鄉先輩平野次郎國臣の血を

◎大往生の頭山翁

頭山滿先生の九十年の業績を數へ立てゝ、讃歎するには、中々僕一人の力の及ぶところではない。但この偉大なる人物を大東亞戰爭の最中に失つたことは、私共一億國民否、大東亞十億の人々と共に痛惜措かないところである。

◎典型的國士

翁の人となりを一言すれば、「國士」—眞の意味に於ける國士の典型的人物であつた。

國內にあつては、民間志士の牛耳を提げ、あらゆる場合、國民の正義運動の頭目として畏重せられ、その大局を透察

うけて、更に之を濾過按排したものである。平野國臣は、維新當時勤皇家として志士の間に尊重せられ、熱血漢として、九州男兒の面目を發揮した。平野先生に於てその文章と才氣とに敬服してゐる。之を頭山翁に比す。或は翁の及ばざるところかも知らないが、その輪廓の雄大にして、感情の純眞なる柔腸剛骨、將に將たる貫目に到つては、翁は嶄然儕輩を抽いてゐる。即ち近代に於ける人豪として翁の如く卓越したる人物は絶無僅有である。否百年不出の英雄魂それが頭山滿である。

◎偉大なる行者

翁について、或は智力方面より、學識方面より、或は統率者として、大親分として、種々の意味に於て評論する人もあらう。

併し私は、翁の本領は、情の人であり、信の人であり、信仰の人であるといふ點を力説したい。その行績を檢して頭山翁は實に豪快の人であるといひ得るが、又一面、謙虛にして清淡、飄々として拘らざる點を見れば、斯く深く天地の大法に瞑合し、眞理の寂光に跪き、幽玄の三昧に出入したことを直ちに了得するであらう。翁は實に偉大なる行者ででもあつた。（了）

頭山滿と牛乳配達

編輯部

頭山翁が人を遇するに篤く相手の身分によつて差別しないことは有名な話である。ときめく高官や實業家がボロ服の書生と前後して客間に通される間など連日くりかへされてゐたやうだ。然も翁はその誰彼にも眞心こめて接したので上は上なり下は下なりで翁から充分敎へられてゐた。例へばこんな話がある。翁が未だ五十二三の頃靈南坂の宅へある朝汚い中學生がその日の訪問客の先陣を承つてやつてきた。例の如く通して話すとそれは牛乳配達の苦學生だつた。是非牛乳をとつてくれと云ふ。翁は別な處でとつてゐるから餘をやらうと答へると、自分はこれから大學まで苦學する、一時に少々餘計に貰つても何にもならない、それより毎日一合、一錢九厘宛儲けさせてくれれば良いと頑張つた。翁はこの答へが大變氣に入つたらしく即日から五合づつ、然も臺所にはごろ〳〵餘る牛乳をとることにきめた。爾後九年間少年が大學を卒る迄續けられ然も毎朝早く手づから瓶をとりに門へ出て端言を與へては少年の心を肥やしたとの事である。苦學生は後志を得て專門學校、中學校の校長になり翁逝去に際してはその學生が途列して葬儀を飾つてゐた。

翁の通夜の風景は他に例のない奇觀であつた。九州から遥々馳せ參じたといふ人の詩吟があつた。又尺八を奏する者があつた。かし何れも翁の通夜に相應しいものであつた。

小磯首相と觀世音

戸松一峰

戰塵がまだおさまりきれず、どことなく硝煙の殘つてゐるやうな昭和十三年五月のことであつた。南京城外の中山陵から南の方にあつた塹壕で數人の兵士達が一心に排水作業をやつてゐた。この壕こそ蔣政權の誤つた抗日政策によつて南京防禦のために構築され、支那軍の奮戰したところであつた。それが新しい大東亞建設といふ華々しい世界の脚光を浴びて輝く大使命を帶びることになつたのである。額に汗して兵士達が鍬をふるつてゐると、その鍬にカチリッと何か觸れたものがあつた。兵士達は不審に思ひ、尙よく注意して掘り出してみると、意外にもそれは一體の觀世音像であり、溢るるばかりの慈悲をたゝへて、壕の中から現れたのであつた。

×

この意義深い觀音像は、いま芝區芝公園に「楔觀音」としてまつられてゐる。而してこの御堂建立の發願者は外でもない內閣總理大臣小磯國昭大將その人である。

小磯大將は支那軍の壕の中から、わが將兵の手によつて發掘された觀音像こそ、日支兩軍の緣に繫つて世に再現されたものであるとなし、その不思議な靈力にいたく感動させられた。もと〳〵支那事變といふものは、大東亞共榮圈確立といふ世紀の大事業に至る一つの陣痛であつた。したがつてこの事變に殘れた勇武な將兵は、たとへそれが日本軍にしろ支那軍にしろ大東亞共榮圈の確立といふ點からみれば齊しく聖なる礎となつたものと云へる。かくてこの觀音像こそは日華親善といふ元來かくあるべき姿を現すために、楔となつて衆生の前にお姿を表はし、同生共死といふ精神をわれ〳〵に暗示されたものである。

奇緣にかじやく像を前にして小磯大將はこのやうに考へ、この觀音像を擁して本尊とし、帝都に御堂を建てやうと發願した。

これを傳へ聞いて多くの有志から早速資金が集つてきた。初めの豫定より遙かに多くたちまち廿數萬圓が集められた。土地を芝公園に卜し、增上寺のすぐ側に御堂が建てられ、名も楔觀音御堂として、昭和十九年四月美事に完成された。それは奈良法隆寺夢殿を髣髴させるやうな淸雅な風情をたゞよはせてゐる。そしてまた靑丹よし奈良の春日社を思はせる丹色が常盤木に映えて美しい。

すぐ前には家康公開運出世の守護佛として知られる辨才天の蓮池があり、また後ろには二代將軍秀忠公の御廟所があり、ポク〳〵と木の間から漏れる增上寺の木魚が聞えるのも如何にも相應しい風情である。

×

小磯大將が組閣して初の大詔奉戴日を迎へ朝ラジオ放送するに當つての模樣を新聞は次のやうに傳へてゐた。

永田町の總理官邸に起居する小磯さんはこの日朝五時には早くも起床、いつもの通り〃みそぎ〃を行つて、官邸の庭から宮城を遙拜、神々を拜み、更に佛間に入つて聖子夫人と並んで佛前に讀經した。そして六時半には官邸放送室のマイクに立ち「大詔奉戴日に當りて」と題して謹話を放送、全國民に呼びかけた。云々

察するに佛前での讀經は恐らくは觀音經でのもあらうか。觀音信仰に徹し、淺草寺觀音に歸依深く、かつては同寺で普門品の講義をして、坊さんはだしの絶讃を浴びた優婆塞國昭居士である。

常願常瞻仰　無垢清淨光　慧日破諸闇
能伏災風火　普明照世間　悲體戒雷震
慈意妙大雲　澍甘露法雨　滅除煩惱焰
淨訟經官處　怖畏軍陣中　念彼觀音力
衆怨悉退散

（觀音經）

觀音様を救世大士と申上げる。特に小磯首相はクサビ觀音を以て大東亞指導の基調とされる。老宰相の太く逞しい誦經の聲が響くやうな心持がする。今や太平洋上に皇國の將來を決するの時、「觀世音菩薩の名號を受持せば是くの如きの無量無邊福德の利を得む」とある。金口の金言を仰いで、豈觀音の靈感なからんやと申したい。

×

苛烈なる戰局に應じて過般永平寺で、弘く一億同胞の心血を結集して一千萬卷の般若心經を淨書して玉體康寧、國土安穩を熱禱して米英撃滅を祈願する運動を全國的に展開した。この時、小磯宰相は墨痕淋漓、雄渾な筆致をもつて心經一卷四十四文字を淨書した。

奉祈禱、皇土安穩、皇軍必勝、摩訶般若波羅密多心經、昭和十九年八月二十四月、內閣總理大臣小磯國昭謹書

觀自在菩薩、行深般若波羅密多時、照見五蘊皆空……と心經にあるところの觀自在菩薩とは、アワローキテーシュヴラの原語の譯で、これはかの玄奘三藏の新譯によるものである。そして法華經普門品卽ち觀音經には舊譯のまゝ觀世音菩薩と申してゐる。この兩者は全く同一なので、心經一卷の趣旨は觀音さまが修行するところのものを說いたのである。皇國の興廢を双肩に荷つて起つた老宰相の胸に徂徠するものは、觀音の妙智力であり、威神力であり、而して大慈悲力であらう。心經を淨書し、熱禱を捧げた心事も時が時なれば一層よく了解が出來る。

謙虛と猛進

佐山學順

人は誰でも正直に、そして眞劍に自分の姿を考へてみればみる程不足だらけで、無力なことに氣がつく。又總ゆる世界をみつめればみつめる程、世の常なき姿が痛感される。餘り氣のないほんとの有樣を實感することから淨土宗の根本信念が生れる。さればこそ智慧第一勢至の再來とあがめられた宗祖上人さへ、御自身では一文不知罪惡深重と云はれてゐた。この反省あつてこそ無我謙讓の生活が送られ、溫容美眼の靜かな心境に住し得られたのである。

然し乍ら一度使命を感ぜらるるや、毅然として身命を捧げ、熱烈なる責任遂行に沒入された。一見天女の如き日常生活で、圓滿相好の宗祖上人は、一度念佛弘通衆生濟世のためとあれば、「たとひ死刑に處せらるるともこの事いはずばあるべからず」の信念を堅持されてゐた。われ〳〵淨土宗徒は自己を反省する時はあくまで謙虛に、しかも國家社會の正義と奉仕のために使命達成に身命を捧げるの信念を持つてゐるのである。

法語
解說

純孝純忠純誠の人に

――法然上人法語抄（其三十六）――

中　村　辨　康

法語

あとを一願にしむれば遺法あまねからず。予が遺跡は諸州に遍滿すべし。ゆへ如何となれば、念佛の興行は愚老一期の勸化なり。されば念佛を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人の苫屋までも皆なこれ予が遺跡なるべし。」（勅修傳第三十七――法語抄二五八）

この御法語は法然上人御臨終に際して、弟子の法蓮房が

解說

「古來の先德方には皆な遺跡がございます。然るにお師匠樣は今に精舍一宇も御建立になつて居られません。若し御入滅の曉に於いては何處を御遺跡とおさだめ致しましたならばよろしうございませうか」

と、御質ねしました。元來上人の御住所は大谷、白川、小松谷等數ケ所ありましたが、何れも寺とする程のものではなく、しかもそれは他の人の提供した家であつたり、ホンの假住居見たやうなものでありましたから、何處を遺跡とすべきか迷ふのも無理がなかつたのであります。

然しながら法然上人御自身に取つて見ればそんなことは問題とするに足りないのであります。御自分の中心とするところは「念佛」より外にはありません。隨つて「念佛心」を持つ民衆が一人でも多くなりさへすればよいのですから、自分の遺跡などと云ふやうなことを、然かも今をも知れない臨終に際して兎や角言ふなどは全く愚にもつかないことを氣にする凡夫心のはかなさであつて、

「自分の心を知つて與れない人」

としてむしろ情なくも思はれたことでありませう。

「念佛の興行は愚老一期の勸化なり」

と、柔かな言葉の中にも必至的な強い敢闘精神が籠つて居るのを感じます。

この敢闘精神こそは猪突的な唯だ徒らに死地を求めて行くものとは違つて、平時でも何時でも死生達觀の用意が出來て居て常に命をかけた覺悟なのであります。されば

「我たとへ死刑に行はるゝとも此の事言はずばあるべからず」

と云ふ強い決意もあり得るわけであります。

命がけの念佛！

誠にしかあるべきことであります。

何事も命がけであるべからざるものはありません。單に信仰だけが命がけではないのであります。また戰鬪だけが命がけではありません。萬事は皆な命がけが至當なのであります。

然るにその氣持が容易に出て來ないのです。一旦緩急ある場合には何の雜作もなく、死に向つて突進することが出來ましても、平素は中々さう云ふ氣持にはなれません。なれるのが本當であつても簡單になれないのは、畢竟「我觀念」が旺勢であるからであり、之に反して一旦緩急の時は急に「我觀念」が折れるからであります。例へば現在の將兵の方々は「悠久の大義に生きる」ことが意識されて我觀念が破れて居るのであります。

信仰は平素に於て「悠久の大義に生きる」ことを確認することであります。少くとも念佛の信仰はそれであります。

即ち「無量壽の中に歸一する」ことこそ悠久の大義に生きるものであつて、他の何ものでもありません。

燒夷彈と初期防火

爆彈は退避すれば大丈夫、燒夷彈はすぐに取組んでしまへば恐るることはない……といふのが東京空襲の體驗から生れた訓へです。但し燒夷彈もすてゝおいては必ず延燒し、多くの人にまで災害をかける恐ろしさがあります。

先日の夜間空襲の際M先生のお宅に廿一發の燒夷彈が落ちました庭の芝生や樹にも落ちて一面火の海のやうでしたが、これは隣組消防隊が直ちに消し止めました。そして戸棚の中に落ちた一發は、護を逸せずM先生が御自分でつまみ出し、砂と水で消されました。物置に落ちた一彈はお孃さんが挺身消し止めて結局何の被害もなく濟みました。初期防火の凱歌です。

かう云ふと淨土の信仰はもつと具體的なものでなくてはならぬと仰るかたもありませうが、その具體的とは若しそれが存在的な淨土、個在的な阿彌陀佛を想定する意味ならば、それは本當の信仰ではなく寧ろ執着と云ふべきものであります。無論「執持名號」と云ふ執着を認めては居りますが、それは佛の善巧方便であります。然し佛教では各々主張するが教義が正しいか正しくないかを批判する規準として「三法印」なるものがあります。諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三に當篏らぬものならば、如何に佛教の名を冠しませうとも、それは「非佛教」とするのであります。既に淨土が涅槃界である限り、無我涅槃の理から離れたものではない筈です。念佛の信仰も淨土の理も、決して三法印から背反したものではなく、かくの如くして既に無我涅槃であるならば、少くとも私達の考へて居る「存在觀」に立脚した個在ではあり得ません。かくて天地全體の綜合的大生命こそ阿彌陀佛の眞身でなくてはなりません。それ故にこそ「無量光」「無邊光」であると共に「無量壽」でもまた「無量佛」でもあるのであります。

觀經第九觀には

無量壽佛並にその相好光明を見奉るものは十方一切の諸佛を見奉る。一切の諸佛を見奉る觀法なるが故に一切の佛身を觀ずと名く。

無量壽佛を見奉る者は即ち十方無量の諸佛を見奉る。故に是れを徧く一切の色身を觀ずるの想となす。

と云つて居るのでもその邊の消息が明瞭に覗はれます。

誠に個在觀を否定する佛教に於て個在的な阿彌陀佛を說く筈がありません。觀經には六十萬億那由陀恒河沙由旬と云ふ佛身の高さを說いて居りますが、六十萬億と云ふ數は形容詞に過ぎないのであります。大體恒河沙と云ふことが數量を超越して居り、少くとも人智で數へ盡されるものではありません。ですから「佛眼は四大海水の如し」とも云つて居ります。即ち「四大海水」とは想像的な須彌山の周圍にある途徹もない大きな海であつて、畢竟佛身は全宇宙一杯に充ち玉ふものであつて、チッポケな分けられたかたまりではないことを物語るものであります。

此の天地に滿つる大生命を如何に表現するかゞ、畢竟哲學であり宗教であつて、同じ佛教の中に於てもその表現の「抽象的」「觀念的」なものは聖道門であり「具體的」なものが淨土門であります。たとへば天地間に滿つる「電力」を「電氣學」として抽象的に取扱ふ方法もあり、また「電機器具」を通じて實際上に把握して行く方法もあるやうに、佛教も亦た菩提涅槃としての抽象的な理論ともなり、また信仰的に自分の身命まで捧げ得る絶對的歸依の對象として獲得することを出來るのであります。

然かもその宗教的信仰――哲學的理論――は私達の「我觀念」を破つて「悠久の大義」に生きるものでなくてはなりません。

大君の醜の御楯として何處までも最大の國家的價値に生きることが、私達の本務、分けられたものの大使命であります。それでなくては人間に生れた甲斐はなく、少くとも「日本人」と云ふ人間に生れて來た價値がありません。

純忠純孝の人間こそ本當の人間で、その外は如何に賢善精進の相を示めしても凡てそらごと、たはごとであります。

念佛を生命として居られた法然上人に取つては「遺跡を作る」ことなどは畢竟そらごと、たはごとであつて、それこそ死して後も尙ほ賢善精進の相で飾り立てやうとする弟子達の氣が知れないのであります。

日本の全國民をして純忠純孝の人たらしむる基礎を與へることこそ、日本淨土教の最大の目的、最大の使命であるべきに、何をうろたへて遺跡を何うのこうのと考ふべきでありませうか。念佛に依つて凡ての人を「孝順心」のものたらしむることこそ法然上人御自身の一生をかけての大使命であられたのであるから、自分の死後と雖もこの意志を繼續して吳れることが最も望ましいことでなければなりません。

さればこそ念佛の聲するところ、それがたとへ賤が苫屋でありませうとも、立派に「我に續ける人」の住む本當の「我が遺跡」であつて、如何に輪奐の美を極むる大伽藍であつても、念佛の途絶へ勝なところならば「我が遺跡」でないことは極めて明確な道理であります。

念佛に終始した法然上人！

それは誠に偉大な信仰の體驗者であります。その末流を汲む私達もまた法然上人の御芳躅を慕つて何處までも賢善精進の相を打破しつゝ純忠純孝純誠の人となりたいものであります。

（附記）三年に亘つて執筆したこの法語解說も本稿で一先づ擱筆いたします。誰かに代つて貰つてと思つても居りますが、その內また折を得て筆硯を新たに致しませう。

歌壇

投稿規程　官製ハガキにて編輯部歌壇係宛へ

生み月に入りたる妻を兵士我れ心に持ちて日々闘みゐぬ　北支派遣　鈴木修吉

評　戰は緊迫苛烈を極めて居るが、その間にも人情のしのび入る一時はある。内地にみごもれる妻を置くこの兵士の歌の何と素直でおほらかで温いことよ、この温かさが、また皇國の礎石の一つであることを人々は忘れてはならない。　北海道　山崎ふじ子

全員の戰死つたはるこのあした白菊の花日に照れるかな

評　太平洋の島々のきびしい戰の現實を國民は身を切られる思ひで正視してゐる。秋のあした、また全員戰死の悲報が發表された時の痛恨や方なく庭に眼をむければ、そこには塵もとゞめぬ白菊の花が日に輝いて崇高な姿を見せてゐる。作者はこの姿にハッと深い感動を覺えたのである何の象徴であらうか。　京都傷療　藤田義之助

月出づる時の遲しと古びたる母の便りを斬壕に讀む

評　なつかしい故國の母を思ひ出して、この兵士は戰場の寸暇に幾度か母の手紙はもはや手ずれて古びてゐるが、兵士にとつては、つも新しい勇氣を與へるものであつた。その手紙は、月の出の遲いのをもどかしがつてゐる。此の夜も月明りに讀まうとして　京都　澤井茂雄

明日はなき生命と遺書　したためしこともありしか焚火明りに　東京　押野尚秀

盟邦のV一號に勝るもの我が神風隊ぞ斷じて敗れず　栃木縣　大輪清

大戰果鷄の聲すら祝ふとて明るくきこゆ山の麓に　北海道　花田順往

くれ易き日かげ惜しみて增産に戰ふ我は汗ばみにけり　鹿兒島　木村櫻草生

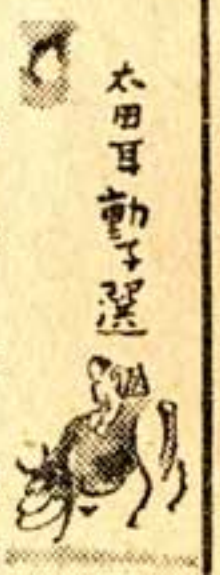
久々の休暇もよそにつはものは農夫と共に小田に稻刈る　長野縣　村袈裟雄

增産に仕へまつると學徒らは朝霜ふみて稻を刈りゐる　京都　坂田正雪

お念佛唱へながらに窓あけて比叡が嶺あふぐ朝のひととき　愛知縣　兒玉ひろ子

何ごとも母の背かず我はたゞもんぺ縫ひつつ嫁ぐ日を待つ

俳壇



投稿規程　官製ハガキにて編輯部俳壇係宛へ

嬉しさは道の邊に播く大根かな　愛媛　丸井政子

日のあたる方へ群れゆく蜻蛉かな　青森　丸尾傳山

隣家は留守や啄木鳥來てたゝく　島根　林良碩

橋守ら川行水の夕殘かな　高知　横山亮

みの蟲のふえて蛙の冬ごもり　愛知　兒玉ひろ子

雨宿りするやざくろの家靜か　藤澤　八木美根子

たよりなき身や秋草につとふれし　東京　篠原龍子

菖蒲の蔭大きく濃ゆし今日の月　京都　末吉榮三

早起の一歩にこゝだ草の露　兵庫傷療　池田曉

生きぬきて芙蓉を見たるしばしかな　館山　高橋秀郎

曼珠沙華岩にとぎれて續きをり　高知　竹原節夫

朝戸出やいかづちやみて稻の花　高知　上田みのる

百舌鳥なくや今日の仕事の何やかや　高知　平野雪女

初雪にコスモスの花照り映えて　栃木　大輪清

鉢ごとの花芽見まわり關の秋　高知　竹原教圓

柿赤くなる一日雲もなかりけり　京都　藤田清城

夜長人坐りなほして語りけり　北海道　高島喜八郎

病蟲つゝめる皇恩の秋給　京都　澤井弘陽

警報の鳴りやむ空や秋高し　平壤　三浦砂千子

夕立や眞晝の夢をさまさるゝ　鹿兒島　中尾正昭

木の葉ちる中に香もなきお茶の花　名古屋　鶴田稱眞

法燈にたゞ白菊の白かりき　三重　澤紫花

水汲の驛馬の目隱し小六月　北支　鈴木長春圃

木犀を佛に手向け母機嫌　館山　小宮武

野路くれば幼心の赤まんま　東京　多摩美鈴

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可　（毎月一回一日發行）
昭和十九年十二月廿日印刷納本・昭和二十年一月一日發行

編輯後記

◇十一月十四日晴、明けそめた朝陽を受けて樹々の葉が美しかつた。紅葉の日增しに深くなるのが感ぜられる。列車が動いて幾つかの小山を通り拔けると目の前に富士が見え出す。肩から上に白雪をのせて、青空にクッキリと浮ぶ。

◇あゝ富士、いままでいろ〳〵の姿で見慣れた聖峰であるが、今朝の富士は目にしみて痛い。萬朶隊の勇士たちが出發の途上この上空を通る時、朝日に映える富士をみて、宮城と富士とこれこそ萬邦無比の國體を表象すると感じ、「これを、これを俺らが護るのだ」と操縱桿を握る手の上には滂沱と落ちる感激の涙があつたといふ。そしてその時、「一時編隊がばら〳〵に離れたのですよ」と田中曹長が各勇士とも同じ思ひだつたと語る、その言葉が耳に響くやうだ。

◇次第に遠のく富士の頂きを車窓で追つてゐる内、昨夜からの感激がまたこみあげてきた。

◇昨夜私は文案を考へながら机に向つてゐた。すると隣室のラジヲが九時の報道を終つて、毎日新聞社特派員の報じる萬朶隊出擊の模様を朗讀してゐた。

◇「〇〇基地における訓練は猛烈を極めたものであつた。それは嚴格な死を遂行する訓練であつた。」

◇「敵有力機動部隊發見の飛電を受取り田中曹長は相好を崩して走り出した。「おーいみんな征くぞ、征くぞ」征くといふことは死ぬことである。この勇士たちは一ヶ月も前から死ぬ猛訓練をつゞけ、今はその死ぬ時が來たといつてはしやいでゐる。」と

◇一言一句聽き洩すまいと耳を傾けてゐた私は、いつかうなだれ聞いてゐた。朗讀が終つて、氣がついてみると原稿用紙の上には涙の跡がしみてゐた。

◇今わが國はこうした勇士達の精神と肉體とによつて驕敵の侵攻からがつちり守られてゐるのだ。それに引き換へ百の議論があつても、それだけでは敵一人倒すことすら出來ないのである。

◇それなのに勇士は「銃後はみなよくやつてくれてゐると思ひます私は喜んで死ぬ事が出來ますよ」と云ふ。この言葉は比喩から出たのではない。生命を捧げた勇士の誠心は、他をもわけなく信じ得る心なのである。神風特別攻擊隊員からは、所持金全部を國防献金に と送られてきたではないか軍需省遠藤中將は涙でもつてこの手紙が讀めず代讀させたといふ。（村瀨）

◇吉田絃二郎先生は九月卅日に宿痾の手術を受け、引續き御入院中でしたがこの程快癒されました。

◇德富猪一郎先生から玉稿を頂き深謝いたします。

◇佐藤春夫先生は南方半歲の旅で若返つたと大變に御元氣です。

淨土　新年號
昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十九年十二月二十日印刷納本
昭和二十年一月一日發行
（定價十二錢）
東京都芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼發行人　眞野正順
東京都芝區芝公園十五號明照會館
印刷人　村瀨秀雄
東京都牛込區市谷加賀町一ノ一二（東京一）
印刷所　大日本印刷株式會社
配給元　東京都神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社
發行所　法然上人鑽仰會　東京都芝區芝公園明照會館內　振替東京八二一一八七番　會員番號二二二五・七八
「淨土」購讀規定
定價　㊗金十二錢（送料二錢）
會費　金一圓六十八錢（送料共）一ヶ年
振替拂込みはすべて十錢增のこと